



—世界に飛び出した「秋田人」—

世界で自由に生きた椎名其二

北条 常久

(あきた文学資料館 名誉館長)

本誌「あきた経済」2018年8月号「ルバイヤット詩で知られる堀井梁歩」で紹介した梁歩が、ミズーリ大学コロンビア校で学んだ時の集合写真がある。その写真は、梁歩の曾孫にあたる桑島生氏が同校のジャーナリズム学部在学中に大学の電子アーカイブから入手したものである。

写真の題字には「Corda Fratres」（コルダ・フラートレス）、「Association of Cosmopolitan Clubs」（コスモポリタンクラブ協会）とあり、その下には、「1907年12月ウィスコンシン州マディソンで組織」と説明がある。メンバーの17名が4列に並び、写真の下には氏名、専攻、卒業年、国籍が明記されている。例えば梁歩は、「キンタロー（本名）ホリイ 農学 16卒 日本」となっている。アメリカはもちろん中国、朝鮮、イタリア、オーストラリア、カナダ、ドイツと国籍は様々で、専攻も農学、芸術、ジャーナリズムと多様で卒業年もまちまちである。しかし、驚いたことにそこに「ソノジ シイナ ジャーナリズム 16卒(ママ) 日本」の名前が見える。堀井梁歩と椎名其二は秋田中学の同期生であるが、学部は違っていても二人ともミズーリ大学に学んでいたのである。Corda Fratresはラテン語で「心の通った兄弟達」という意味で、コスモポリタンクラブ協会は国際的な学生平和団体であるから、二人はここで学生運動に参加していたのである。

椎名其二は、明治20年に秋田県仙北郡角館町上丁に士族で地主である椎名徳治、マツの次男として誕生し、兄純一郎に続いて秋田中学校に進学し堀井梁歩と同期となる。

椎名其二の伝記、蜷川謙『パリに死す』（藤原書店）の年譜で明治36年頃には次のようにある。

「16歳。先生を殴る事件を起し、五人とともに退学処分を受ける。学校に抗議するストライキを起し、校長は辞職し、多数の生徒が他中学に転校。椎名は慶応普通部に転入学。」

椎名は、明治38年18歳で早稲田大学英文科に入学する。そこで、椎名はアメリカ帰りのキリスト教社会主義者の安部磯雄の講義を聞き、明治41年早大を中退してアメリカに渡り、ミズーリ大学ジャーナリズム科に入り、イギリスからアメリカ入りした堀井梁歩とともに学ぶことになったのである。

安部磯雄は早大に野球部を創設してアメリカ西海岸に遠征し、社会主義研究会を組織し、後に社会民衆党を樹立し自らも第一回普通選挙に立候補し当選を果たした。椎名はアメリカ帰りの安部磯雄に刺激されて渡米した。

当時、アメリカでは日本人移民の多い太平洋海岸では日本人排斥運動が盛んであった。椎名は、それを大学新聞に「アメリカにおける日本人排斥と人種差別」というエッセーにして投稿した。

そのエッセーの一節を『パリに死す』から次に引用する。

「大学の校庭を出ると知らず知らずのうちに、アメリカならでは見られないような、ホイットマンのいわゆる“Grand espace” (広大な空間) に入ってゆく。広々とした空の下に雑木林をのせて、波のよううねりをうっていき際涯なき平野である。溪の底にせせらぐ燈明な流れは、ホイットマンが時折り真裸になってつかったのも、こうした溪流ではなかったかと思われた。私はこの大詩人の詩集をポケットに入れて、この果てしなき林のつらなりの間をさまよい歩くのを唯一の慰安としていた。」

椎名は26歳の、大正2年に卒業し、ボストンやセントルイスの新聞社に勤務したが、椎名の心に住みついた自然とともに自由に生きる人生の姿勢はその後一貫していた。秋田中学以来の友人である梁歩とともに、アメリカの各地を行商などして放浪の生活もした。

大正3年、フランスでは平和運動の指導者ジャン・ジョレスがパリで国粋主義者に暗殺される。秋田出身の「種蒔く人」の小牧近江はこの時パリでマンサルド(屋根裏)生活をしており反戦平和への思いを強くする。アメリカでも各新聞は一面に大活字で「ジャン・ジョレス暗殺される」と報じた。椎名其二はその新聞を読んだ時の思い出を次のように語る。

「ある日新聞で、フランスの田舎には人手が不足しているという記事が目についた。フランス農法には独特のものがあると聞いていた上に、私はロマン・ロランやジャン・ジョレスを近くから知りたいという願いもあったので、この

情報を知って矢も楯もたまず、スペイン船の四等客室に乗り込んでいた。十分の金を持たず、フランス語ひとつも知らないのにもかかわらず、若さが私をフランスに渡したのであった。」

(『中央公論』1958.1)

大正4年、梁歩は帰国するが、椎名は自然とともに生きる農業で生きようとジャーナリストの職を捨て、マサチューセッツ州の西部にあるアムハースト農業学校に入ったが農民にはなりきれなかった。彼は大学時代の平和運動そのままに心は第一次世界大戦下のフランスに移ってしまった。しかし、自由人椎名其二の人生はこれからが大変である。パリでは英語しかできないのでは職を得ることはできない。しかし、第一次世界大戦中のフランスでは男性の労働力が不足で、彼はピレネー山麓の牧場での仕事を得たが、その地でマリー・ラヴァイユという女性と恋に落ちた。

大戦が終了してヴェルサイユ平和会議が始まる。小牧は、会議の通訳として活躍するが、椎名は日本の新聞社のために働く。日本人記者のためにフランス語の新聞を読んでやったり、情報を提供したりした。

彼はこれが元で日本との関係ができ、フランス人の妻を連れて帰国する。秋田の地で堀井梁歩と農業の共同経営をするが失敗。そこで東京に出て、中退した早稲田大学でフランス語の教鞭をとる。しかし、妻マリーの望郷の念は強く子どもを連れて帰国してしまう。彼も早稲田大学の引き留めを振り切ってフランスに帰る。その後の椎名其二はパリにいてフランスの農業と社会を学び、日本からの留学生のための指南役として貢献した。